

---

# 敗北論～こぎつねと二人の男

めけめけ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

敗北論〜こぎつねと二人の男

### 【Nコード】

N9361P

### 【作者名】

めけめけ

### 【あらすじ】

人気のない山のなかにひっそりとたたずむ小屋の中に銃を持った男と縄に縛られた男がいる。

二人の関係は童謡の『こぎつね』をきっかけに微妙に変化していく

## **(前書き)**

とある小説コミュニティでのお題小説を一部書き直しました。書き上げた後、なんともいえない余韻が残り、自分でも気に入っている作品です。

『いぎつね』

こぎつね コンコン 山の中 山の中  
草の実 つぶして お化粧したり  
もみじの かんざし つげのくし

こぎつね コンコン 冬の山 冬の山  
枯葉の着物じゃ ぬうにもぬえず  
きれいな もようの 花もなし

男が二人、人里離れた山小屋の中にいる。

外はすっかり暗くなり、灯り無しでは歩くこともままならない。  
山道を30分ほど登ったところだというのに、その山小屋は、誰にも気付かれず、誰にも知られず、誰の口の端にも上らない場所。

一人は縄で縛られ、身動きすることができない。  
一人は猟銃を構え、縛られた男に向かって、なにやらわめき散らし  
ている。

「よし、わかった。それじゃあ、こうしよう」  
猟銃を持った男はニヤニヤしながら縄で縛られた男の耳元で話し始める。

「これからゲームをしよう。簡単なゲームだ」

縄に縛られた男は顔中に痣があり、口元から血が流れている。  
どうやら猟銃を持った男に散々暴行を受けたようだ。

「唄を歌ってもらおう」

猟銃を持った男は鼻歌を歌い始めた。

そのメロディは、子供の頃によく聴いたことがある童謡だった。

たしか、子狐が、化粧をしたりとか……たぶん『こぎつね』という題名だ。

「さーて、この曲の歌詞を間違いなく歌うことができるかな？」

まるでクイズ番組の司会者のようだったが、男が持っていたのはマイクではなく猟銃だった。

「三回間違えたら……ズドン！なんてなあ」

猟銃を持った男はカラカラと笑いながら縄に縛られた男の頭を猟銃の銃身で小突いた。

「制限時間は日の出まで……ってかああああ、かつ、かつかつ」

狂っていやがる！

縄に縛られた男は、心の中でそう履き捨てた。

どうせ命を助けるつもりはないのだろう。

それにしても……

縄に縛られた男は、なんとも複雑な心境だった。

まさか、こいつ、知っていて言っているのか……それとも単なる偶然か？

縄に縛られた男は、大声で歌いだした。

フックス、ドウ　ハス　ディ　ガンツ　ゲシュトーレン

Fuchs, du hast die Gans gestolen

ギプ エス ヴィーデア ヒーア  
G i b e s w i e d e r h i e r

ギプ エス ヴィーデア ヒーア

G i b e s w i e d e r h i e r

ゾンスト ヴィアツ デイヒ デア イエーガア ホーレン  
S o n s t w i r d d i c h d e r J a g e r h o l e  
n

ミッ デム シースゲヴェア

M i t d e m S c h i e s g e w e h r

ゾンスト ヴィアツ デイヒ デア イエーガア ホーレン  
S o n s t w i r d d i c h d e r J a g e r h o l e  
n

ミッ デム シースゲヴェア

M i t d e m S c h i e s g e w e h r

猟銃を持った男は、一瞬ためらった。

銃身は縄で縛られた男の頭に向けられ、引鉄にはしっかりと指がか  
けられていた。

「おい、今のはなんだ？ 貴様、この期に及んで俺をからかっている  
のか？」

縄で縛られた男は気丈に猟銃を持った男をみつめ、口を開いた。

「この唄はなあ、もとはドイツの民謡だ。今のは原曲だよ」

猟銃を持った男は狂喜の悦から不意に覚まされた不快感と何か面白いものを見つけたときのような好奇心が混ざり合ったなんともいえない顔をした。

「おいおい、まさかテメエ、でまかせじゃないだろうな？」

猟銃を持った男の目は、不気味なぐらいに真剣な眼差しで縄で縛られた男を睨みつけた。

「日本の童謡じゃねえのかアレは……オレは小さい頃あの歌が好きでよく、学校の先生がああ唄を歌うと褒めてくれたんだよ。オレはこの通りだからよく。人に褒めるなんてことはねえ。だからよく覚えてんだよ、この歌は……だからよく、お前さん、デタラメはいけねえよ。なあ、アンタそんなに早く死にてえのかあ？ 本当ならちやんと聞かせてもらわねえとな、ドイツ語じゃあ、なんて唄ってた？」

猟銃を持った男の問いかけに、縄で縛られた男は一瞬戸惑った。

まあ、いい。

こういう死に方も悪くない。

一つくらい、自分の知識を誰かに残せて死ねるのだ。それがどんな悪党であろうと、単位をとることしか興味がない学生に、念仏のようにドイツ語の教鞭をとることに比べたらまだ、ましなのかもしれない。

「いいだろう。教えてやる。一番はこうだ」

キツネよ、君はガチヨウを盗んだね

元のところへ返しなさい

元のところへ返しなさい

さもなくや狩人がお前を捕まえに  
鉄砲を持ってやってくるぞ

さもなくや狩人がお前を捕まえに  
鉄砲を持ってやってくるぞ

一瞬の静寂。銃を持った男はじつと縄で縛られた男を見つめている。  
真剣な表情だ。

「2番はあるのか？あるなら続けろ」

銃を持った男は、縄で縛られた男に促した。銃は構えたまま。しかしその目は真剣そのものだった。

そして静寂。さっきよりも長い。

こんなに真剣なまなざしで見つめられたのはいつのことだったか？  
思わぬ形で最後の教鞭をとることになったが、これもまた人生なの  
かもしれない。大きく息を吸って、縄に縛られた男は口を開いた。

「そして2番はこうなる」

ザイネ グローセ ランゲ フリンテ

Seine grose, lange Flinte

シースト アオフ デイヒ デン シュローツ

Schiest auf dich den Schrot,

シースト アオフ デイヒ デン シュローツ

Schiest auf dich den Schrot,

ダス デイヒ フェアプ・デイ ローテ テインテ



Das dich fahrt die rote Tinte

ウン ダン ビス ドゥ トーツ

Und dann bist du tot,

ダス デイヒ フェアプ・ディ ローテ テインテ

Das dich fahrt die rote Tinte

ウン ダン ビス ドゥ トーツ

Und dann bist du tot.

縄で縛られた男の声は震えていた。恐怖からなのか、興奮からなのか、いや、もし興奮しているのだとしたら、何に対してなのかかわからない。

縄で縛られた男は、銃を持った男を見つめる。そこには純真な瞳がふたつ、早く次を、早く次をとせかしているように見えた。だから、縄で縛られた男は続けた。

「2番の訳は、こうだ」

狩人の大きくて長い銃が

君をめがけて弾を撃つ

君をめがけて弾を撃つ

赤いインクが君を染めて

君は死んでしまうぞ

赤いインクが君を染めて

君は死んでしまうぞ

縄で縛られた男は思った。いつこの猟銃で頭を吹っ飛ばされるかわ

からない。でも、いい。何も思い残す事がないわけではないが、それでも、もっと理不尽な生き方というものが、世の中にはあるものだ。

「そして、これが最後、3番だ」

リーベス フクスライン、ラス ディア ラーテン  
Liebes Fuchslain, las dir rate  
n

ザイドホ ヌア カイン デイープ  
Sei doch nur kein Dieb

ザイドホ ヌア カイン デイープ  
Sei doch nur kein Dieb

ニム、ドウ ブラオフスト ニヒト ゲンゼブラーテン  
Nimm, du brauchst nicht Ganserb  
raten,

ミツ デア マオス フォアリース  
Mit der Maus vorlieb.

ニム、ドウ ブラオフスト ニヒト ゲンゼブラーテン  
Nimm, du brauchst nicht Ganserb  
raten,

ミツ デア マオス フォアリース  
Mit der Maus vorlieb.

「意味は――」

縄で縛られた男が最後の訳を語ろうとしたとき、猟銃を持った男は銃身を縄に縛られた男の口に押し当て、言葉をさえぎった。

「待て、待つんだ……」

縄に縛られた男は一瞬自分の命がこれで最後だと覚悟を決めた。いや、覚悟を決めたのはもっと前だったはずだが、それは無駄だったようだ。どんなに覚悟を決めてもやはり、死ぬのは怖い。殺されるのはもっと怖い。

「待ってくれ、その先は言わないでくれ」

縄で縛られた男は気付いた。銃口が小刻みに震えている。猟銃を持った男をみると、その目には涙が浮かび、こぼれようとしていた。

「俺は、今まで他人のものを奪うことも、命を奪うことも、ためらうことはなかった。俺は自分が生きるために人から物を奪い、必要とあれば……いや、そうでなくたって俺はたくさん殺してきた」

縄で縛られた男はどんなに銃を持った男が心変わりをしたように見えても死の覚悟を解けずにいた。いや、どうやって解いていいのかかわからなかった。

「俺の殺してきた奴らも、いっぱいいっぱい俺の知らないことを知ってたんだなあ、きつと……そんなこと俺は……俺は今まで考えた事がなかった」

縄で縛られた男は思った。

どうにもおかしいことになってきた。しかし、なんという皮肉。

日ごろ自分が教えている学生は、ノートをとるのに、つまりは単位を取るのに一生懸命かもしれないが、この男のように真剣に私の言葉に耳を傾けたりはしなかった。一体自分は誰に向かって、何の教鞭をとり続けてきたのか？

そんな疑問に持ちながらも、いつの間にか、『これは喰うために仕方のないことだ』とどこか割り切っていた。『仕事』とは、『生きる』とは、そういうことじゃないか。

しかし、自分の目の前には腹を空かせた盗人が、私を縄で縛り付け、猟銃の銃口を向けているという状況は何一つ変わっていない。私は……私は死にたくはないのだ。

「で、どうするんだ。この後のどうなったかを知りたいのなら学べばいい。それは私を殺そうがどこでもできることだ。妙な話だが、私はお前さんが思っているような、そんな大それたことを知っているわけでもなんでもない。ただの大学の非常勤講師だ。お前さんが殺した人間よりも、ぜんぜん価値はないのかもしれないぞ」

『私は何を言ってるんだ？ 私は死にたくないのに、何を言っている？』

その疑問に答えられるだけのもの——今の自分の人生に対する執着、生きることに意味、或いは哲学や宗教のようなすがりつくものが、縄で縛られた男の内側には、何もなかった。

『俺はどうしたらいいんだ？』

その疑問に答えられるだけのもの——生き残るため以外に価値があること、食べてゆくため以外の知恵、自分は何のために生きているのか、或いは己を律するべき道徳や信仰のようなものが、猟銃を持った男の内側には、何もなかった。

男が二人、人気のない山道を登った小さな小屋の中にいた。二人は道に迷い、戸惑い、見つめあい、答えを求めている。静かなときが流れていく。

二人は子狐のように小首をかしげて考えるしかなかった。

仕方がないので、縄に縛られた男は心の中で歌い続けた。

キツネ君、忠告するが

泥棒なんてやめておけ

泥棒なんてやめておけ

ガチョウの焼肉は要らないだろう

ネズミで我慢しろよ

ガチョウの焼肉は要らないだろう

ネズミで我慢しろよ

仕方がないので、銃を持った男は心の中で歌い続けた。

こぎつねコンコン

穴の中

穴の中

大きな尻尾は

じゃまにはなるし

こくびをかしげて

かんがえる

ズドーン！

人気がない山に一発の銃声が木霊する。

そして静寂のあと

一羽の金色のガチョウが小屋から飛び立っていった。

## （後書き）

子供の頃、慣れ親しんできた童謡が、実は外国のもので、しかも歌詞の内容が日本語のものとまったく違ったりしたときの心のひっかかりを作品にしてみました。その後、銃を持った男と縄に縛られた男がどうなったのか、自分にもわかりません。ただ、どんな結果になろうとも、金色のガチョウは飛び立つのだと思います。確信ではありませんが、なんとなくそう思う、いや、そう思いたいですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9361p/>

---

敗北論～こぎつねと二人の男

2011年10月7日23時38分発行